

『伊曾保物語』 成立についての一考察

——イソポの伝記を中心に——

濱 田 幸 子

〔抄 録〕

16世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳され国字文語体で書かれた『伊曾保物語』は、江戸時代初期、一般に広く普及した。『伊曾保物語』が刊行当初から出版され読み続けられたのは、それが寓話であり、その寓意がその時代にふさわしい教訓として受け入れられたからと考えられる。『伊曾保物語』の翻訳原典は先行研究によって15世紀後半に出たシュタインヘーヴェル本『イソップ』であるとされているが、『伊曾保物語』には序文も後書きもないため、成立の事情がわからない。そこで、同時期にキリシタンによってローマ字口語体で出版された『イソポのハブラス』と比較しながら『伊曾保物語』を読むことで、この書がどういうねらいで翻訳編集され、どのような経緯を経て、一般の日本人を対象とした教訓書として出版されるに至ったのか、その一端を明らかにしようとする。

キーワード 『伊曾保物語』、『イソポのハブラス』、シュタインヘーヴェル本『イソップ』

はじめに

16世紀後半、キリスト教布教・伝道を目的に来日した宣教師によって伝えられ、日本語に翻訳された「イソップ寓話集」には二種ある。一つは、ローマ字口語体で書かれた『イソポのハブラス』、いま一つは国字文語体で書かれた『伊曾保物語』である⁽¹⁾。『イソポのハブラス』は、文禄2(1593)年天草学林^{コレジオ}で出版されたが、鎖国時代の発禁措置もあり、一般には流布せず、現在世界中に唯一冊、大英博物館の所蔵本があるのみで、その存在は、明治になって知られるようになった。一方『伊曾保物語』は、慶長・元和年間版から寛永16(1639)年刊本まで九種の古活字本が出、その後万治2(1659)年には挿絵入り製版本も出て一般に広く普及した。『伊曾保物語』はわが国における最初の西洋翻訳文学なのである。キリスト教の宣教師によって伝えられた書物であるにもかかわらず、『伊曾保物語』が刊行当初からよく読まれ、鎖国後も出版され読み続けられたのは、それが寓話であり、その寓意がその時代にふさわしい教訓として受け入れられたからと考えられる。しかし、この書がどういうねらいで翻訳編集され、どのような経緯を経て、一般の日本人を対象とした教訓書として出版されるに至ったのか、『伊曾保物語』には、序文も後

書きも無く、そういったことに対しては何も語られていない。本論文は、『イソポのハプラス』と比較しながら、『伊曾保物語』本文を読むことによって、この問題の一端を考えようとするものである。

一 『伊曾保物語』『イソポのハプラス』の原典について

『伊曾保物語』と『イソポのハプラス』は、ともに前半に伝記、後半に寓話の二部立ての構成だが、伝記部分は『伊曾保物語』三十話中二十二話までが『イソポのハプラス』と共通の内容で、寓話部では『伊曾保物語』六十四話と『イソポのハプラス』七十話のうち共通話は二十五話だけである。『伊曾保物語』は上中下の三部構成で、上巻二十話、中巻四十話、下巻三十四話からなり、それぞれの話には、番号と話の題が付けられている。一方『イソポのハプラス』では「イソポが生涯の物語略。」「エゼットよりの不審の条々。」「イソポ養子に教訓の条々。」「ネテナボ帝王、イソポに御不審の条々。」「イソポが作り物語の抜き書。」「イソポが作り物語の下巻。」と見出しが付けられているが、前の四部はイソポの伝記、後の二部はイソポの作った物語と二大別される。イソポの伝記部は、『伊曾保物語』では、上巻二十話と中巻の九話までを占める。また、『イソポのハプラス』では、イソポの伝記部は二十三話と話数は少なく、『伊曾保物語』とは話順の異なる部分はあるが、話の内容は一話を除き共通である⁽²⁾。

ところで、『伊曾保物語』の翻訳原典については、小堀桂一郎氏が、『イソップ寓話』で、次のように述べている⁽³⁾。

第一に、「原・伊曾保物語」の直接の底本はシュタインハーヴェル本である。ただしそれが、すなわち私の参照したシュトゥットガルト文芸協会刊の翻刻本と同じ形の初版本であった、とは言えない。『伊曾保物語』上巻の第十四、中巻の第七、下巻の第十七、第三十、第三十四の計五篇はこの原本中に見出すことはできない。これらをも含んだシュタインハーヴェル本の一異本が直接の底本だったのであろう。次に、『伊曾保』は祖本たる「原・伊曾保物語」に一応忠実であり、そこからはみ出すような要素はないが、「イソップ伝」の部分においては祖本の範囲内で自由な編輯・改作の手を加えてある。むしろこのような編輯や改作ができたのは、底本がラテンの原本ではなく、扱いやすい国字本だったからこそだ、とも言える。第三に、『ハプラス』の下巻は「原・伊曾保物語」からはみ出す部分があまりに多く、これを底本と呼ぶことはできない。部分的には(最大限十七篇)「原・伊曾保物語」から採ったか、それとも全篇まとめて別の原本に拠ったか、いまのところ判定はつかない——、といったことになる。『イソポのハプラス』は少なくともその上巻あるいは「正篇」については、祖本たる「原・伊曾保物語」を口語に語り直してローマ字で綴ればよかった。

シュタインハーヴェル本『イソップ』というのは、ドイツ人ハインリッヒ・シュタインハーヴェルが、十五世紀までの西欧に流布していた各種のイソップ寓話集を集大成し、編者独自の見地から編纂・構成した大部のもので、現在のところほぼ1476年乃至77年の刊行と推定されている⁽⁴⁾。シュタインハーヴェル本『イソップ』の構成は次の通りである⁽⁵⁾。

第一部 イソップの生涯

第二部 ロムルス集「イソップ寓話」四巻（各巻二十篇の計八十篇）

第三部 選外寓話集（十七篇の動物寓話）

第四部 レミキウス集（もと百篇あったものから抜粋された十七篇）

第五部 アヴィアーヌス集（もと四十二篇あったものから抜粋された二十七篇）

第六部 イソップに由来するものではない中世の世俗説話・民譚 二十二篇

（※第六部に入ってしまった話で、ロムルス集所収の話が一篇あるため、合計すると総数百六十四篇）

そして、この本について、「この書物の最大の特徴は、収録寓話の全篇につき中世に広く行われていた通りのラテン語のテキストを主体とし、その全てにシュタインハーヴェル自身の手による忠実なドイツ語訳を添えてあるということである。」と紹介されている⁽⁶⁾。このシュタインハーヴェル本は1873年にシュトゥットガルトのドイツ文芸協会が、〈溯り得る限りの最も古い版本〉の本文を復元しており、小堀氏はこの復元本と、『伊曾保物語』『イソポのハブラス』を比較対照することによって、上記の結論を導き出している⁽⁷⁾。さらに、小堀氏の「『伊曾保物語』原本考——シュタインハーヴェル本『イソップ集』に就いて——」（上、下）には、このシュタインハーヴェル本が出版された後立て続けに数種類、十数版の模倣版が印刷され、1483年には、ジュリアン・マシュによる原典に忠実なフランス語訳（但し寓話の数は三編の省略がある。）が出、この仏訳に基づいてカクストンの英訳本が1484年に刊行されたことが記されている。また、シュタインハーヴェル本のラテン語原文とドイツ語訳とを分離し、それぞれを独立に印刷した版本も現れ、ドイツ語訳部分には、十六世紀に入ってから、セバステイアン・ブラントが加筆し、若干の自筆の寓話を追加したもので刊行され、この書がさらに、何度か版を改め、繰り返し印刷されていて、「版を改めるごとに刊行者による多少の改訂や取捨選択が加えられ、収録の寓話の数にも増減が生じ、少しずつ形の違つたものになつていつた。」とある⁽⁸⁾。ドイツ語訳本と同じことはラテン語原本についても起こり得る。小堀氏は続けて「十六世紀の末葉にイエズス会士の一人が携へて日本に齎したイソップ寓話集のラテン語本が、畢竟このシュタインハーヴェル本の一つであるにせよ、それは初版刊行から百年近くも後の、何度か改版を経た後の一版本に違ひないのである。（中略）ラテン語本の場合は近代語訳と違って本文自体に加筆・修正が施されるといふことは殆どなかったと思はれるが、収録すべき寓話の取捨や配列に就て、刊行者の意向・見解によ

る多少の変更は常に生じたであらう。我々は十九世紀の文献学者の努力によって、ラテン語・ドイツ語併載のシュタインハーヴェル本初版本に最も近いと考へられる一個の復元版を利用することができるわけであるが、これと、我が近世邦訳本の直接の底本となつたであろう一版本との間には、やはりある程度の異同があるであらうことは先ず想定しておかなくてはならない。」と書いている⁽⁹⁾。小堀氏によると、『伊曾保物語』に載っているイソポの伝記話と寓話は、上巻の第十四、中巻の第七、下巻の第十七、第三十、第三十四の計五篇を除いてシュタインハーヴェル本『イソップ』の中に含まれ、寓話部の掲載順もほぼ一致している。しかしながら、『イソポのハブラス』では、「イソポが作り物語の下巻。」は、殆どが『伊曾保物語』にはない話であり、シュタインハーヴェル本に含まれてる話も45話中17話しかなく、「部分的には(最大限十七篇)「原・伊曾保物語」から採ったか、それとも全篇まとめて別の原本に拠ったか、いまのところ判定はつかない——⁽¹⁰⁾」ということになり、これだけは、シュタインハーヴェル本以外に原本を求めなければならないのである。

この小堀氏の論考を受けて、さらに『イソポのハブラス』の原典について考証したのが遠藤潤一氏の『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究』正編、続編、総説である⁽¹¹⁾。遠藤氏はシュタインハーヴェル本の一本として、仏訳からさらに英訳されたカクストン集を比較の対象に用いて検証し(後に小堀氏と同じ復元本も比較検討しているが)、この本のほうがさらに『伊曾保物語』に近いことを指摘し、さらにシュタインハーヴェル集の1489年刊スペイン語訳本(エンリケ王子の命によって翻訳され、普及されたとの序文がある)ではイソポ伝冒頭部の内容がさらに近いと指摘している。また、『イソポのハブラス』のイソポの伝記部及び「イソポが作り物語の抜き書き」はギリシア語ラテン語対訳系の一本によって校訂され、「イソポが作り物語の下巻。」はそのギリシア語ラテン語対訳系の一本にもとづいて作られたとしている。このギリシア語ラテン語対訳系の本とは天理図書館蔵本であるイソップの集成本で、1534年本と1596年本がギリシア語ラテン語対訳で、1542年本と1575年本とはラテン語本文のみを有する本であるが、これらの本は、「イソポが作り物語の下巻。」にある話全てを含んでいる。つまり、遠藤氏によると、『伊曾保物語』の祖本(国字・文語体)はシュタインハーヴェル本の近代語(スペイン語訳本の可能性も高い)訳本にもとづいてつくられ、『伊曾保物語』は祖本がほぼそのままの形で印刷出版された。一方『イソポのハブラス』は祖本に基づいてイソポ伝、「イソポが作り物語の抜き書き」がローマ字・口語体の形で作り始められたが、途中で方針が変更され、遠藤氏が指摘しているシュタインハーヴェル本より新しい集成本であるギリシア語ラテン語対訳系の一本によって加筆修正され、その本によってさらに「イソポが作り物語の下巻。」が付け加えられて出来たということである。

二 イソポ伝の構成

『伊曾保物語』『イソポのハブラス』の原典が何であったかについての先行研究の成果を前章で見てきたわけだが、本稿の目的は、西洋文献の日本で最初の翻訳本であり近世において非常によく読まれた『伊曾保物語』が、どのようにして成立したのか、つまり、どういうねらいで翻訳編集され、どのような経緯を経て、一般の日本人を対象とした教訓書として出版されるに至ったのかを少しでも明らかにするところにある。そのために、現存する、『伊曾保物語』と参考文献として非常に大きな位置を占める『イソポのハブラス』の本文を精緻に読んでいきたいと思う。そこでまずイソポ伝の構成について見ていくことにする。

ところで、本稿は、『伊曾保物語』『イソポのハブラス』が成立する前に外国人宣教師が将来したイソップ寓話集の原典の日本語翻訳本（以下祖本という）が存在し、それに依拠してそれぞれに省略・加筆・改変が加えられて『伊曾保物語』『イソポのハブラス』が出来たという立場に立ってこの後の考察を進めていく。そしてこれは、遠藤氏の『伊曾保物語』イソポ伝成立に対する考えには異を唱えるものである。遠藤氏の、『伊曾保物語』イソポ伝が祖本のイソポ伝をそのまま受け継いでいる、言い換えれば祖本から『伊曾保物語』が作られる間には改変がないとする考え方と、『イソポのハブラス』は原典を大幅に改変・加筆して翻訳した祖本を原典に復元したものであるとする考え方⁽¹²⁾に対してである。以下に、二つの点を取り上げて論証していく。

1 イソポの人物紹介について

『伊曾保物語』によると、イソポの紹介は次のとおりである。

さる程に、エウロウパのうち、ヒリジヤの国トロヤといふ所に、アモニヤといふ里あり。その里に伊曾保といふ人ありけり。その時代、エウロウパの国中に、かほど（の）みにくき人なし。その故は、頭は常の頭に（なし）二つがさあり。眼の玉つはぐみ出で、その先平らかなり。顔かたち、色黒く、両の頬（う）なだれ、首ゆがみ、背低く、足長くして太し。背（か）かゞまり、腹ふくれ出で、まがれり。物いふ事おもしろき（げ）なり。その時代、このイソポ、人にすぐれて見苦しく、きたなき人なり。（みにくき物なきがごとく、）されども（その上）、才覚、又並ぶ人なし。

〈上巻 「第一 本国の事」の冒頭〉

*本文は『万治絵入本伊曾保物語』（岩波文庫）による。（ ）は古活字版『伊曾保物語』（旧版岩波日本古典文学大系『仮名草子集』）による校訂。

イソポは「顔かたち、色黒く、両の頬（う）なだれ、首ゆがみ、背低く、足長くして太し。背（か）かゞまり、腹ふくれ出で、まがれり。」と書かれ、また「見苦しく、きたなき〈あるいはみにくき〉人」と書かれているように、異形の人であった。しかし一方、「物いふ事おもしろき」人、話すこ

とは面白い、つまり弁舌の才のある人であったと紹介されている。

ところが『イソポのハプラス』では

エウローパのうちヒリジヤといふ国のトロヤといふ城裡の近辺にアモニヤといふ郷がおぢやる。その郷に名をばイソポというて、異形不思議な人体がおぢやつたが、その時代エウローパの天下にこの人にまさつて醜い者もおりなかつたと聞こえた。先づ頭^{かうべ}は尖り、眼はつばうしかも出て、瞳の先は平かに、両の頬は垂れ、頸^{ゆが}は斜み、丈は低う、横ばりに、背は屈^{くぐ}み、腹は腫れ、垂れ出て、言葉は吃りでおぢやつた。これらの姿をもつて醜いこと天下無双であつた如く、智恵の長けた者もこの人に並ぶことはおりなかつた。

〈「イソポが生涯の物語略」の冒頭〉

*本文は『吉利支丹文学集2』（新村出、柊源一校註 平凡社東洋文庫 1993年）所収の『イソポのハプラス』による。

となっていて、イソポがみにくいことは同じであるが、また吃音であったことが記されている。『伊曾保物語』でも『イソポのハプラス』でも、イソポはその後の話の中では、才覚に優れ、その才覚を言葉巧みに語り、言葉の力で、奴隷であった身分から自由の身になり、さらには、諸国の王から信頼され重臣に取り立てられてゆくのである。イソポが吃音であったとすると、その後の話に展開していくのには無理があるのではないかと思うのである。実は、小堀桂一郎氏の『イソップ寓話』によると、吃音どころか口のきけなかつたイソポが、親切にしてあげたイシスの神殿への巡礼の祈願によって、突然口がきけるようになったばかりか、更に寓話や各種知恵話を語る才能をイシスの女神から授けられるという話が、ギリシア語原文はいうまでもなく、プラヌーデス編のラテン語訳『イソップの生涯』にも載っている、ということである。勿論『伊曾保物語』の翻訳原典と推定されるシュタインハーヴェル本『イソップ』にもこの話は載っている⁽¹³⁾。日本に伝わったイソポの伝記には、吃音であったが、神の力で、吃音がなおり、さらに雄弁になったことまで記述されていたのだろうが、祖本の段階では、イソポが吃音であった事だけが記されていて、『イソポのハプラス』はそのまま記述したということだろう。しかし、『伊曾保物語』の編者は、そこに、ストーリー展開上矛盾が生じるので、思い切って、原話とは反対の内容である「物いふ事おもしろ^き（げ）なり。」としてつじつまをあわせてしまったのではないだろうか。先の『伊曾保物語』引用文に示したとおり、イソポの吃音を「物いふ事おもしろ^き（げ）なり。」とすると同時に、それに続く言い換えの部分では、数種出版されている古活字本にはA「その時代、このイソポ、人にすぐれてみにくい物なきがごとく、その上、才覚、又並ぶ人なし。」とB「その時代、このイソポ、人にすぐれて見苦しく、きたなき人なり。されども、才覚、又並ぶ人なし。」との二通りの本文が見られ、万治絵入本の本文は後者である。Aは、イソポが、その醜さにおいて他に並ぶ者がいないと同様に、それに加えて才覚も並ぶ人がなかつた、という意味で

ある。『イソポのハブラス』でこの箇所を見ると、「これらの姿をもつて醜いこと天下無双であつたごとく、智恵の長けた者もこの人に並ぶことはおこなかつた。」となっていて、Aの表現と同じである。祖本ではAの表現であつたろうことが想像される。しかし、この表現は、人にとっては良くない不幸な事である醜さと、人にとって好ましい幸せな事である才覚をもつということが同列にみなされていて不自然である。一方Bは、イソポは並はずれて見苦しくきたない人であるが、才覚は並ぶ人がない、とイソポの見苦しききたなさと才覚に優れていることを逆接で結んでいる。おそらく、『伊曾保物語』が最初出版された時はAの形であつたものが、不自然さを解消するためにBの形に改変されたのであろう。このことから、日本人の手に渡り出版されていく中で、ストーリー展開を円滑に進めるための本文の校訂改変が行われていたことが窺われる。

それでは、イソポ伝の主人公イソポが吃音であつたがイシスの女神から話せる力を与えられ、寓話や知恵話を語る才能を与えられるという話が省かれたのはどうしてだろうか。それは、イソポに力を授けた神がキリスト教の神ではなかったからではあるまいか。イソップ寓話集を初めに日本語に翻訳したのはキリシタンであり、この第一段階では、まずキリスト教以外の神に関する内容は省くという、編集方針がとられたのではないかと想像されるのである。小堀桂一郎氏の「『伊曾保物語』原本考——シュタインハーヴェル本『イソップ集』に就いて——(下)」に掲載された対応表によると、シュタインハーヴェル本にはイソポ伝の最後にデルポイ人に捕まったイソポがアポロの神殿に逃げ込み、また引きずり出された時に譬喩を三つ語るといふ話があるがそれらはすべて省かれている。これも、イソポが逃げ込んだのがキリスト教の神殿ではないからであろうと推察される。現存していないため、どのような内容であるかは分からないが、最初にシュタインハーヴェル本『イソップ』を日本語に翻訳した祖本については、そのような翻訳・編集方針がとられたといえるだろう。しかし、『伊曾保物語』が祖本と全く同じとはいえず、また、編集方針が同じとはいえない。原典を翻訳した祖本に、その本の由来や翻訳の目的を示した序がなく、また、明らかにひとつのまとまりであるイソポ伝を、その途中で巻を分けるということが、不自然であり、作為を感じさせるからである。また、「イソポが作り物語の抜き書き」までは、ほぼ祖本に基づくと考えられる『イソポのハブラス』では、イソポ伝とイソポが作った物語とは大別されているのである。『イソポのハブラス』と比較してみると、『伊曾保物語』には、キリシタンではない人物の編集意図が見えてくるのである。

2 伝記部の物語配置について

『伊曾保物語』と『イソポのハブラス』のイソポの伝記部分には、話数と話順に違いがある。二つを対応させて『イソポのハブラス』の話順を基準にして配列し、さらにシュタインハーヴェル本『イソップ』も対応させて表にしたのが、後に示す表である。

『伊曾保物語』におけるイソポの伝記話の数は、条数でいうと29である。それに対して『イソポのハブラス』では「イソポが生涯の物語略」に18話、「エヂットより不審の条々」で1話、「イ

『伊曾保物語』成立についての一考察 (濱田幸子)

表 『伊曾保物語』『イソポのハプラス』シュタインハーベル本『イソップ』比較表(伝記部分)

☆原本の章番号

『イソポのハプラス』		『万治絵入伊曾保物語』			シュタインハーベル本『イソップ』		
話順		話順	巻	条	話順	☆	
1	1①	イソポが生涯の物語略	1	上	1	1	
2	1②		4	上	3	2	1
						3	2
						4	3
						5	4
3	1③	((イソポが主人)が旅をしたときに下人に荷物をもたせて…)	3	上	2	5	4
4	1④		2	上	1	6	5
						7	5
						8	6
5	1⑤		5	上	4	9	7
						10	8
						11	8
6	1⑥		6	上	5	13	11
						14	12
7	1⑦		7	上	6	15	13
						16	14
8	1⑧		8	上	7	17	15
						18	15
						19	16
						20	17
9	1⑨		9	上	8	21	18
10	1⑩前	(シャントの妻が珍物を貰えず怒って里に帰る話)	10			12前	9
11	1⑩後		30	中	8	12後	10
12	1⑪	(ここでイソポシャントより自由になる)	11	上	9	22	19
13	1⑫		12	上	10	23	19
14	1⑬前		13	上	11	24	20
15	1⑬後		14	上	12	25前	20
16	1⑭		19	上	17	25後	21
17	1⑮		20	上	18	26	21
18	1⑯		21	上	19	27前	22
19	1⑰		22	上	20	27後	22
20	2	エジツトより不審の条々	24	中	2	29	24
21	3	イソポ養子に教訓の条々	23	中	1	28	23
22	4①	ネテナボ帝王イソポに御不審の条々	25	中	3	30	24
23	4②		27	中	5	31	25
24	4③		31	中	9	32	26
						33	26
						34	26
						35	26

24	4③		31	中	9		36	26	⑤デルボイ人はイソボを崖から突き落として殺した。その後デルボイを疫病がおそ。ギリシャの諸侯は軍勢を送り、イソボ殺害の挙に復讐した。
			15	上	13	商人、金を落とす公事の事			(第六部、アルフォンス寓話集抄) 4
			16	上	14	中間と待と、馬を争ふ事			
			17	上	15	長者と他国の商人の事			(第六部、アルフォンス寓話集抄) 2
			18	上	16	イソボと二人の侍、夢物語の事			(第六部、アルフォンス寓話集抄) 5
			26	中	4	イソボ、帝王に答ふる物語の事			(第六部、アルフォンス寓話集抄) 8
			28	中	6	侍、鷓鴣に好く事			(第六部、ボツヂウス笑話集抄) 5
			29	中	7	イソボ、人に請ぜらるる事			

※シュタインハーベル本『イソップ』の中の*印は『伊曾保物語』『イソボのハブラス』には無い話。

ソボ養子に教訓の条々」で1話、「ネテナボ帝王イソボに御不審の条々」に3話の合計23話である。

シュタインハーベル本『イソップ』と『伊曾保物語』『イソボのハブラス』とを比較してみると、シュタインハーベル本にある話で『伊曾保物語』『イソボのハブラス』に採られていない話がシュタインハーベル本の章段で12章分ある。それらの話は、前節で述べたキリスト教以外の神に関する内容は省くという編集方針による省略に加えて、品性に欠ける話も省かれている。そして、これらの省略は、『伊曾保物語』『イソボのハブラス』ともに共通している。このことは、『伊曾保物語』『イソボのハブラス』が基にしている祖本が同じシュタインハーベル本の抄訳であることを示している、と言ってよいだろう。しかし、話順についていうと、『イソボのハブラス』は二カ所だけシュタインハーベル本と異なる。まず、「エヂットより不審の条々」と「イソボ養子に教訓の条々」の順序が逆である。それに対して『伊曾保物語』はシュタインハーベル本の順序と同じである。『イソボのハブラス』の場合、この二つの章の題には序数はついておらず、それ以外の章と違ってこの二つの章だけが一章に一話の構成である。そのため、祖本から、口語ローマ字に改められるときに、順序が入れ替わってしまったということもあるかもしれない。もう一つは、シャントの妻が珍物をもらえず怒って里に帰ってしまい（『イソボのハブラス』⑩前）イソボの才覚で妻が戻ってくる話（『イソボのハブラス』⑩後）がシュタインハーベル本では「獣の舌の事」の前であるのに、それより四話後の「棺槨の文字の事」の後になっていることである。この点を除けば、『イソボのハブラス』はシュタインハーベル本と同じ話順である。それに対し『伊曾保物語』では、上巻1条「本国の事」は『イソボのハブラス』「イソボが生涯の物語略」の第1話と第4話を合わせたものである。『イソボのハブラス』では、第4話でイソボがシャントの奴隷になり、第2話第3話は、別の主人との話であるのに対して、『伊曾保物語』では第2条も第3条もシャントとの話になっている。ここまでの『イソボのハブラス』の話順はシュタインハーベル本『イソップ』と同じで、『伊曾保物語』が第1条から奴隷イソボと主人シャントの対立の構造になるように改変されていることがわかる。また、シュタインハーベル本にある「主人を変えることになった話」は『伊曾保物語』『イソボのハブラス』ともに無く、その後続く「荷

物を持つ」話は、シュタインヘーベル本では奴隷商人が奴隷たちに荷物を持たせる話であるのに、『イソポのハブラス』では、イソポの初めの主人が、また『伊曾保物語』ではシャントが、旅に出るときにイソポも同行し、その時の話となっている。ところが『イソポのハブラス』第4話のイソポがシャントの奴隷になる話では、この時イソポは最初の主人の奴隷であるのに、「それより後に、かのイソポにいま二人を買ひ添へてサモといふ所へ行いた。その所にシャントといふ学匠が有つたが、かの商人に行き向うて、先づ二人の能芸をたづねらるゝに、」と、突然、奴隷商人に引き連れられている場面になる。これは、原典にあった「主人を変えることになった話」を省いた時に生じた矛盾がそのまま残っているのである。しかし、『伊曾保物語』では、第1条「本国の事」の中で、まづ、戦で搦め取られたイソポが「アテルスといふ国のアリシテス」という人物に売られ、そののち、「ある商人、この者を買取り。アリシテス、得たりかしこしと、かの商人に売り渡さる。猶別の二人買ひ添へ、以上三人召し具して、サンといふ所に難なく行きけり。その里におゐて、シャントといへる、やんごとなき知者の行逢ひ、かの商人に尋ねて云く、」とイソポが奴隷商人に売られた事が書かれていて、話に矛盾はない。「主人を変えることになった話」を省いても話に矛盾が生じないように『伊曾保物語』では、加筆されているのである。ただ、この「アテルスといふ国のアリシテス」という人物はアテネのアリストテレスのことであろうか、シュタインヘーベル本には登場せず、どうして、ここに挿入されたのか疑問の残るところである。

次に、『イソポのハブラス』の「イソポが生涯の物語略」第10話前半、シャントの妻が珍物を貰えず怒って里に帰る話は『伊曾保物語』にはなく、その続きの話第10話後半のシャントの妻が里からシャントのもとに戻る話は、『伊曾保物語』では人物が変えられ別人の話として中巻8条の「イソポ、夫婦の中直しの事」に出ている。

『伊曾保物語』では、上巻第1条「本国の事」でイソポはシャントの奴隷になり、第9条までの伝記部の前半は、奴隷のイソポが知恵でシャントを助けたり、懲らしめたりし、最後には知恵を使って奴隷から自由の身になるところまでである。後半は第10条から、中巻9条で、自由民イソポが、国々をまわり、国王の質問に答え、知恵を働かせて国を救う話や、バビロニアのリクルス王に大切にされ国の参謀となる話、そこで、養子を立て、教訓し、その後、ギリシヤのある国で殺される話で終わる。このような不具の身のイソポが自らの知恵によって運命を切り開き、奴隷の身分から自由になり更に諸国の王から信頼され、重用されるというとても興味深い出世話となっている。丁度、下克上の戦国時代の中で、身分に関係なく、武力知略に長けた者が天下を治めるようになっていく姿を目の当たりにしている当時の読者にとっては、物語としてだけではなく、現実の事のように読めたかもしれない。

ところで、『伊曾保物語』の上巻の第13、第14、第15、第16、中巻第4、第6、第7の7つの話は、『イソポのハブラス』にはない。これらのうち第13、15、16、中巻第4、6の5話はシュタインヘーベル本におさめられているが、「イソップ寓話」ではない話である。先の4話は、第一章に示

したシュタインハーヴェル本『イソップ』の構成の第六部に属すアルフォンス寓話集抄、後の1話は同じく第六部に属すポッチウス笑話集抄に収められている話である。上巻14条中巻7条の二話は、現在のところ出典は不明であるが、このように、『伊曾保物語』では、シュタインハーベル本のイソップ伝にはない話をイソポの逸話として、あとの寓話部分から挿入しているのである。このことから『伊曾保物語』ではイソポの逸話を増やし、イソポの賢人ぶりをさらに強調していることがわかる。こうして見てくると、『イソポのハブラス』の方が原典に近いということが言える。そしてまた、改変された後の話の矛盾も残したままの、校正途中の未整備な書物であったとも言えるだろう。次に国字文語体の『伊曾保物語』が出版されたねらい及び経緯について考えてみたい。

三 『伊曾保物語』の成立について

小堀氏は、第一章の引用で見たように、『伊曾保物語』のイソポの伝記部におけるこれらの改変について、「祖本の範囲内で自由な編輯・改作の手を加えてある」とし、この編輯・改作をしたのが、キリシタンであるのか、一般の日本人なのかについての言及はない。

一方、遠藤氏は『伊曾保物語』イソポ伝について、「抄本としての再構成がまことによくできて」いて「抄本としての脈絡に矛盾が無く、細かな注意が行き届いている」とし、「抄本としての完成度は天草本（『イソポのハブラス』のこと、筆者注、以下同じ）イソポ伝の場合よりも高い」と記述している。そして、『伊曾保物語』イソポ伝の完成度の高さは「原典の内容をよく把握したところから生じたものと考えられる」とし、それは「古活字本（『伊曾保物語』のこと、筆者注、以下同じ）イソポ伝が古活字本祖本（祖本のこと、筆者注、以下同じ）イソポ伝の構造をそのまま受け継いだから」と推測している。一方、「省略の態度が一致しているから」、「天草本イソポ伝の構造も、根本的には古活字本イソポ伝と同じであり」、「天草本編者が依拠した古活字本祖本の構造」は「古活字本の構造と同じ」であると考えている。「そして、天草本編者の編集方針の特徴は、古活字本祖本イソポ伝の範囲を原典的な姿に戻すことにあったと考えられる」と述べる。そして、その理由は、「天草本の編集目的がヨーロッパ人宣教師のための日本語テキストということであったから」であるとしている⁽¹⁴⁾。

しかし、二章でみたように『イソポのハブラス』が物語展開上の矛盾を含むということは、『イソポのハブラス』が依拠した祖本にも同様の矛盾があったと考えるほうが自然である。なぜなら、物語が次に引き継がれたり、受容されていく過程では、矛盾するところが解消されるか、そのまま引き継がれることはあっても、矛盾もなく完成度の高い話を故意に矛盾させるということは、よほどの理由が無い限り考えられないからである。『イソポのハブラス』の場合キリシタンが西洋の文学を日本に初めてもたらして、宣教師の日本語稽古あるいは、日本人への布教の一助となるべく、印刷出版されたものであるから、わざとに不完全なものにするということは、あり得な

いことに思える。したがって、『イソポのハブラス』のもつ矛盾は祖本の持つ矛盾でもあったと考えるべきだろう。『イソポのハブラス』が祖本のイソポ伝部を原典的姿に復元したものだとする考えは、『伊曾保物語』が祖本をそのまま受け継いでいるとする考えに基づいている。しかし、『イソポのハブラス』イソポ伝のほうが祖本をそのまま受け継いでいるとしたら、そして、『伊曾保物語』の改変・別話の挿入が祖本から『伊曾保物語』が作り出される時におこなわれたとしたら、上記の不自然さは解消するのである。

ところが、遠藤氏は、これらの改変を日本人が出版するときの作為とは考えられないと、いつている。そして、その根拠に、イソポの伝記部冒頭部の改変（イソポは言葉が不自由だったがその行いによって能弁になる話の省略）をあげ、またイソポ伝以外からの話の挿入を指摘して、「七話の巧みな挿入方法から考えると、それらの挿入は欧文原典に接していた編者にしかできない業であると言える。それは古活字本祖本編者の手になるものと推定される」と述べている⁽¹⁵⁾。イソポの伝記部冒頭部の改変は『イソポのハブラス』でもあるわけで（『イソポのハブラス』ではつじつまのあわないままになっている。）、この改変はキリシタンによる原典翻訳時になされた改変と考えてもよいだろう。しかし話の挿入については、シュタインハーヴェル本『イソップ』の原典翻訳本（祖本）が存在したとすれば、その中にはこれらの話も入っていたわけで、イソポの業績をふくらませるために、逸話を増やすことは、日本人にもできたと思われる。かえって、『イソップ寓話集』についての知識のない日本人の方がそういった改変はしやすかったかもしれない。

『伊曾保物語』は、由来は明らかにならないよう配慮しながらも、自らの知恵と弁舌によって運命を切り開き、奴隷の身分から自由になり更に諸国の王から信頼され、重用されたイソポが、良き道を示した教訓書という、非常にまとまった構想の書物である。このような形を祖本がもっていたとして、これに手を加えて、話に矛盾を含んだ、全体の構成に欠ける形の『イソポのハブラス』をキリシタンが作り、出版するという事は考えられないのである。

『伊曾保物語』の成立について、次の二つの場合を想定することが出来るだろう。

- 〈1〉日本人にキリスト教を布教するためにキリシタンが作った。つまり、祖本がそのねらいで、訳出され、そのままの形を『伊曾保物語』が受け継いでいると考える。（遠藤説）
- 〈2〉キリスト教宣教師がもたらしたイソップ寓話集が翻訳されて作られた祖本の段階でキリシタンの手を離れて日本人の手に渡り、一般の日本人のための一つの教訓書として、日本人が編集して作った。

〈1〉に従って考えると、キリシタンはローマ字・口語体の『イソポのハブラス』と国字・文語体の『伊曾保物語』の両方をほぼ同時期に作ったということになる。『イソポのハブラス』制作の目的は、キリシタン宣教師（外国人）の日本語稽古のため、またよき道を人に教え語る方便のためである。一方『伊曾保物語』はその形態からして日本人に向けて作られたものであり、内容から考えられることは、キリシタンによって作られたとするなら、遠藤氏が言うように日本人にキリスト教を布教するためか、『イソポのハブラス』と同様によき道を人に教え語る方便と考

えられる。両書がほぼ同時期に同じキリシタンによって作られたとしたら、両書がなぜこれほど違っているのかということが疑問になる。日本人によき道を教え語るための方便として、日本人に読みやすい国字本と、ローマ字本で外国人に読みやすい形だが全く同じ内容の本があれば、外国人宣教師にとってとても使いやすいただろうし作るのも容易であると思うのである。そして、両書を同じキリシタンが作ったのであれば、そのようにしただろう。従って、『伊曾保物語』はキリシタンによって作られたものではないだろうと考えられるのである。

〈2〉に従って考えると、キリシタン禁制の中、祖本が日本人の手に渡り、仮名草子の一つという外見で出版されたので、『伊曾保物語』は多く出版され、読み継がれた。第二章で見たとおり、古活字本から万治絵入本にかけての改変もあるわけで、「祖本」から『伊曾保物語』への改変は当然あったと思われる。最初に出版された古活字本『伊曾保物語』も、日本人の手によって、それがキリシタンのもたらした書物であると分からないように、序文、後書きは載せず、寓話部の初めで序文的な働きをしていると分かる中巻第10条は巻の途中になるように配置していると考えられるのである⁽¹⁶⁾。

ところで、遠藤氏の言うように『伊曾保物語』は祖本がほぼそのままの形で印刷出版されたのだろうか。祖本が現存していないので、『伊曾保物語』が祖本そのままなのか改変されているのかという議論はできないが、祖本に基づいて『イソポのハブラス』も出来ているとした場合に、この二書から祖本について少し考えることが出来ると思うのである。

あらためて、『イソポのハブラス』と『伊曾保物語』のイソポ伝を比較すると、『イソポのハブラス』の方が原典に近くまた改変したために起きた矛盾点がそのまま残されている。この点『伊曾保物語』は改変が更に進み、『イソポのハブラス』に見られる矛盾点はない。ある段階までの共通祖本と考えられる「祖本」が『イソポのハブラス』と同程度の矛盾を含むもので、『イソポのハブラス』作成時にはそれを訂正せず（時間的余裕がなかったか？）に出版したのではないかと考えられる。『イソポのハブラス』は、序のあとに、「イソポが生涯の物語略。」「エヂットよりの不審の条々。」「イソポ養子に教訓の条々。」「ネテナボ帝王、イソポに御不審の条々。」「イソポが作り物語の抜き書。」「イソポが作り物語の下巻。」と章題が付けられているが前の四部はイソポの伝記、後の二部はイソポの作った物語（寓話）と二大別される。伝記部は、「イソポが生涯の物語略。」の後に、そこに入れなかった三つの話を付け足した形で、寓話部では「イソポが作り物語の抜き書。」は上巻とはなっておらず、後のものにだけ下巻と付けられている。寓話部は、初めは上下に分けるつもりはなかったが、その後に物語を付け足すことになったので、付け加えた物語を下巻としているのである。つまり、『イソポのハブラス』は、初めから全体を見通した構成はされていない。出来たものを付け加え付け加えたそのままの形で、出版したもので、章題からも全体としての構成を考える時間的余裕がなかったように見えるのである。さらに章題とその内容について見ると、「イソポが生涯の物語略。」は、シュタインハーヴェル本『イソップ』からイソップの逸話をいくつも省略してできていることがわかる⁽¹⁷⁾。また、『イソポのハブラ

ス』寓話部の「イソポが作り物語の抜き書き。」は『伊曾保物語』と比較してみると、一例を除いて、すべての話が『伊曾保物語』にあり、まさに「抜き書き」なのである。そして、その後に置かれた『イソポのハブラス』の「イソポが作り物語の下巻。」は二例を除いて『伊曾保物語』には一致しない。これから考えてみると、『イソポのハブラス』は全く見出しの通りの内容であるといつてよい。そして、この見出しは『イソポのハブラス』が作られた時に付けられた見出しであろう。そうすると、『イソポのハブラス』のイソポ伝「イソポが生涯の物語略。」「エヂットよりの不審の条々。」「イソポ養子に教訓の条々。」「ネテナボ帝王、イソポに御不審の条々。」もこれらの話が作られたとき、つまり、祖本から『イソポのハブラス』が作られるときに冠されたと考えてよいのではないか。そして、『イソポのハブラス』と比較すると『伊曾保物語』のイソポ伝はさらに話の省略と加筆があり、矛盾も解消されているのであるから、祖本がそのまま『伊曾保物語』になったとは言えないだろう。

私は、『イソポのハブラス』については、祖本から「イソポが作り物語の抜き書き。」までが作られ、この時イソポの伝記部の改変はほとんどなかったであろうと思う。また、寓話部は祖本からの抜き書きだったのだと思う。そして、「イソポが作り物語の下巻」は遠藤氏の言うとおりにシュタインハーヴェル以外の『イソップ寓話集』が加えられてできあがったと考える。一方、『伊曾保物語』は、祖本がどういう経緯を経てかは分からないが、日本人の手に渡り（イソップ寓話の翻訳に係わったキリシタン〈外国人か日本人かも分からないが〉と親しかった日本人が祖本を手にする機会を得たのかもしれない）、この書を高く評価した人物によって、教訓書として、日本でも受け入れられる形に改変して出版されたと思うのである。『伊曾保物語』のイソポ伝が、『イソポのハブラス』と違って、各条に題が付けられているのは、『イソポのハブラス』と同じ形であったと考えられる祖本（シュタインハーヴェル本『イソップ』の伝記部も一話一話に題は付されていない）のイソポ伝の第1話と第4話を合わせて第1条とし、その内容をまとめて「本国の事」と題を付けたことに始まり、その後も話のまとまりごとに題を付けていったためであろうと思う。そうすると、イソポ伝以外の寓話集からイソポの逸話として、話を挿入するのもやりやすかったと思うのである。

『伊曾保物語』成立に最終的に係わった人物は、キリシタンとは距離をおいた日本人であろう。そして、『伊曾保物語』作成の目的は、日本人にキリスト教を布教するためではなく、この書の面白さと教育的内容を一般庶民に知らしめようとしたことであろう。そのために、この書物の来歴がわかる序を省き、二部仕立てであったものを三巻本に改め、さらにイソポの逸話を増やしてまとまった賢人イソポ伝を初めに置いた教訓書の形で出版したのである。

〔注〕

- (1) 本論文で使用した本文は、国字文語体のものは『万治絵入本伊曾保物語』（武藤禎夫校注 岩波文庫 2000年）で、『古活字版伊曾保物語』（旧版日本古典文学大系『仮名草子集』所収）によって校訂した。一方、ローマ字口語体のキリシタン版のものは、『吉利支丹文学集2』（新村出、柗源一校註 平凡社東洋文庫 1993年）所収の『イソポのハブラス』であるが、『天草本伊曾保物語』（新村出翻字 岩波文庫 1939年）、『キリシタン版エソポのハブラス私注』（大塚光信 臨川書店 1883年）も参考にした。キリシタン版の呼び方が統一していない上に両者の名前がよく似ていて紛らわしいため、国字本を『伊曾保物語』、キリシタン版を『イソポのハブラス』で呼び分けることにした。
- (2) 『伊曾保物語』の第一話の中に、『イソポのハブラス』の1話と4話を含むため、『伊曾保物語』と『イソポのハブラス』の「イソポの伝記部」の話は三十話中二十二話が共通と認定する。共通でない話は、『伊曾保物語』では上巻の13、14、15、16、中巻の4、6、7の各話であり、『イソポのハブラス』では、10番目の「シャントの妻が珍物を貰えず怒って里に帰る話」である。
- (3) 小堀桂一郎『イソップ寓話』（講談社学術文庫2001年〈原本は中公新書1978年〉）第Ⅱ部、一「キリシタン版ローマ字本と古活字版仮名草子本」182、183頁による。
- (4) (3) 掲載書第Ⅰ部、四「近世印刷本時代のイソップ寓話集」146頁。また「その初版本と推定されるものの原物が今日まで伝わってはいるのだが、それに印刷刊年の記載がないため正確には何年の出版であるかがわからない。ただ書中に1476年のレミキウス本再版からの引用がある故に、それ以後の年の刊であることは間違いなく、また1483年にはこの書の外国語訳が登場するのであるから、この年より以前のものであることも確実、」とも書かれている。
- (5) (3) 掲載書第Ⅰ部、四「近世印刷本時代のイソップ寓話集」による。
- (6) (5) に同じ。148頁による。
- (7) 小堀桂一郎『『伊曾保物語』原本考——シュタインハーヴェル本『イソップ集』に就いて——（上、下）』（『文学』岩波書店 1978年10月、12月）。
- (8) (7) 掲載論文による。
- (9) (8) に同じ。
- (10) (3) に同じ。
- (11) 遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 正編』（風間書房 1983年）。
遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 続編』（風間書房 1984年）。
遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 総説』（風間書房 1987年）。
- (12) 遠藤潤一『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 総説』（風間書房 1987年）Ⅱ、第二章 古活字本・天草本のイソポ伝の諸問題。
- (13) (7) 掲載論文〈下〉の三書対照表による。
- (14) (12) に同じ。104頁による。
- (15) (12) に同じ。191頁による。

『伊曾保物語』成立についての一考察 (濱田幸子)

- (16) 拙稿「『伊曾保物語』と江戸時代におけるその受容について」(『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』第38号(2010年3月1日))参照。
- (17) 『伊曾保物語』『イソボのハブラス』シュタインハーベル『イソップ』比較表(伝記部分)参照。

(はまだ ゆきこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導:黒田 彰 教授)

2010年9月10日受理